

研究発表要旨 ワイルドと荘子

上 條 真 一

(元東京工芸大学女子短期大学部教授)

オスカー・ワイルドは、ハーバート・A・ジャイルズによる英訳『荘子——神秘主義者、道学者、そして社会改革者』(1889)の書評「中国の賢者」(“A Chinese Sage”)を1890年2月の『スピーカー』誌に掲載した。

「荘子は偉大な Inaction (無為) の信条を唱道して、あらゆる有用なるものの無用さを指摘し、己れの人生を費した。『Do nothing, and everything will be done.』(『為すなくして為さざるなし。』『老子』第四十八章)は荘子が偉大な師老子より継承した教義であった」と、ワイルドは言う。

ワイルドの述べる荘子の思想を次のように要約したい。

1. 政治なき政体の古代自然社会への回帰。

支配者は、個人に干渉し、「人の隣人に対する仁義」(charity and duty to one's neighbour)を強要して、人の天与の善と真の知恵を破壊する。この元凶は、儒家の仁義兼愛の教えである。

2. 仁義を棄て、真の道德である「道」(TAO)の^{じゆんしゆ}遵守。

宇宙を見つめる以外は何もしない境地に至った聖人の心は「万物の鏡」(the speculum of creation)のように平和である。しかも「^{なんじ}而の天」(the Heaven within you)を棄てるなど説く。この個人の心情の絶対的な自由と平静を求める荘子の信条は、「自己修養と自己発展の理想」にあるとした。

3. 「無為」の絶対的心境による批評精神。

荘子は無為に終始し、世界はそれ自体が、その価値を顕現するものであることを知って、「^{なんじ}而の義を成すなかれ」(do not bring about your own good deeds)と説き、己れを勞することがなかった。この無為の哲学を成立させるものは、万物が皆「一」なるを説く「^{かいぶつろん}齊物論篇 第二」(CHP. II., The Identity of Contraries)のこの「矛盾の自己同一」の論理に基づくものであることをワイルドは看破している。

荘子の信条は、宇宙の運行に象徴される根元的な道=道德に復帰することであり、儒家・墨家の説く道德を破壊することであった。このことをワイルドは知って、「荘子は非常に危険な作家であることは明瞭である」とし、ワイルドは自ら言うこの「荘子の破壊的批評」を己れの芸術に試みた。特に、芸術がこの世の道德から超脱出来得る論理の根拠を、荘子

が儒教に反逆する雄渾な批評精神に啓発され、独自の社会批評的芸術論を形成するに至った。

これは、「芸術家としての批評家」(1891)であり、「社会主義下の人間の魂」(1891)の評論である。前者の論旨の中で、「芸術批評家は、神秘主義者と同様に、常に道德律廃棄論者である」と、ワイルドは言う。この批評家は、荘子が「道」を以って、この世の道德を否定するように、道德に縛られた無知を追放して、自己完成を美の世界において果たそうとした。この中で、悪辣な慈善家どもが「人間に在る素朴な、おのずから為る美德を破壊してしまったことを立証した」のは荘子であると、ワイルドは述べている。

「人間の魂」の中で、「個人主義は社会主義を通して達成すべきものである。国家はあらゆる統治の観念を放棄しなければならない。この理由は、かつて、西暦紀元前幾世紀にある賢人が説いたように、人類をあるがままにしておくようなことはあるが人類を統治するようなどことはないからである」と説かれている。

このことについて、H. Montgomery Hyde の *The Annotated Oscar Wilde* (1982)におけるこの「賢者」の注記(p. 404, n. 17)は、“It is impossible to identify the ‘wise man’ precisely...”と誤記されている。上記傍点(筆者)の箇所は、「中国の賢者」の中で荘子の言う「天下を在宥するを聞くも、天下を治むることを聞かざるなり」。(在宥篇 第十一)の意である。正に、この「賢者」は荘子である。

荘子の説く「統治なき社会」に個性的な芸術家だけが存在する政体こそワイルドが求めた社会主義社会であり、これは、まさしくユートピア的芸術の王国であった。

ワイルドの荘子論「中国の賢者」は、ワイルドの芸術論を社会批評として大きく飛翔させる契機となった。ワイルドは、無為にして^{おのづか}自ら為る個性をもつエゴイストだけのユートピアを創造した。荘子もエゴイストであった。^{なんじ}「而の義を成すなかれ」と説き、虚無恬淡無為清静にして道と冥合して生きる処生法をも説いている。

荘子は「道」を以って道德と対決し、ワイルドは美を以って道德と対決した。美を創造するために燃えたワイルドの批評精神の炎は、個性の時代への道を煌々と照らして燃え尽きることはないであろう。

講演要旨 ワイルドとロンドン

小 池 滋

(東京女子大学教授)

オスカー・ワイルドについて語ろうと思えば、最近出た本、